九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Charlotte Brontë のVilletteにおける 語りによる抑圧された情熱の解放

轟, 裕美
九州大学人文科学府修士課程

https://doi.org/10.15017/20040

出版情報：九大英文学. 52, pp.1-19, 2010-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

Charlotte Brontë の *Villette* における

語りによる抑圧された情熱の解放

轟　裕美

序

Villette (1853)は、Charlotte Brontë の最後の作品であり、前三作品に共通する、結婚による主人公の願望達成を拒否し、主人公、Lucy Snowe が家族や恋人を失う経験を繰り返し、喪失の苦悩の中で生きる半生を語った物語である。本作品の中で Brontë は、主人公の情熱の描写に、多くの頁を割いており、これまで多くの批評の中で Brontë の描いた情熱が議論されてきた。Brontë の同時代人である George Henry Lewes は、彼女の作品中にあふれる情熱の描写について賞賛し、George Sand を除いては、同時代人の中で、作品中の“Passion and Power”について、彼女に並ぶものはないと言った。[1]David Cecil は Brontë に人間の心理を分析する能力が欠如していることを指摘し、彼女の作品中に描かれる「情熱」は、“not exercise of the mind, but cries of the heart”[2]であると批判した。Matthew Arnold は、著者が作品に自分の“hunger, rebellion and rage”[3]という情熱を詰め込んでだとして、*Villette* に対する不快感を表明している。このように、Brontë は、怒りも反発も愛も全てが混在する、強烈な感情を「情熱」として描いた。本論においても、「情熱」という概念は怒りも苦悩も愛も全てが区別されずに包含された感情であると定義する。

Villette において「情熱」という概念が特に重要なのは、その取り扱われ方について主人公の性質も構造も類似する *Jane Eyre* (1847)と比較しても大き

く異なるためである。Jane の場合、彼女の情熱は、Mr. Rochester への愛と正義感に向けられるが、この二つは、Mr. Rochester との結婚によって達成される。Jane は情熱を外に向かって発散し、それをエネルギーに変えて自分の人生を切り開く。しかし、Lucy の情熱は、常にその発散を抑制する力が働き、Jane のように、情熱を燃やして生きることができない。主人公の命名に関する Charlotte Brontë の手紙は、彼女が Lucy の情熱を意図的に抑圧されたものとして描こうとしたことを示している。Brontë は Smith, Elder 社の W. S. Williams に宛てた手紙の中で、主人公を Lucy Snowe と名付けた経緯を以下のように説明している。

> As to the name of the heroine, I can hardly express what subtlety of thought made me decide upon giving her a cold name; but, at first, I called her "Lucy Snowe" (spelt wit an "e"); which Snowe I afterwards changed to "Frost." Subsequently, I rather regretted the change, and wished it "Snowe" again. If not too late, I should like the alteration to be made now throughout the MS. A *cold* name she must have; partly, perhaps, on the "lucus a non lucendo" principle ―partly on that of the "fitness of things," for she has about her an external coldness.[4]

Brontë は、主人公に"a cold name"を与えたいと考えていた。これは、一方では、冷たい名前が"lucus a non lucendo"、すなわち、名称と反対の性質をもつという主人公の性格を表現するためであり、また一方では、その名の通りの冷淡な外見にうまく当てはまると考えたからである。Brontë は、熱い情熱を抱えながらも、それが Jane のように表面上に現れず、外見は冷淡な女主人公の物語を描こうとした。この名前の屈折の結果、*Villette* は、心に秘めた激しい情熱を抑圧し、同時に、この抑えられた情熱を解放するはけ口を追い求める物語になった。本論では、子供時代の情熱、Graham への情熱、M. Paul への情熱という三度の抑圧された情熱に着目し、Lucy Snowe の「語り」という行為が、その情熱を解放する手段であることを主張したい。

I　子供時代の情熱の抑圧と解放

Lucy は子供時代から Mme. Beck の学校で教師として働くまで、自分の感情を語らず、他人の人生の傍観者となり、他人の人生についてばかり語っている。子供時代の物語は Lucy 自身ではなく、Paulina と Graham の物語であり、自活を始めてからは、Miss Marchmont や Mme. Beck の人生についてばかり語る。物語の中で、主人公であるはずの Lucy の個人的な体験や感情はほとんど語られない。このように、「個」を押し殺した状態の Lucy を、批評家はさまざまに形容している。Terry Eagleton は、Jane とは異なり、苦悩の動機となるものがほとんどないにもかかわらず Lucy は苦悩していると批判しており、[5] Athena Vrettos は、そのような Lucy を「神経症」(“neurosis”)と呼んだ。[6] Russel M. Goldfarb は、「抑制された性的欲求」 (“repressed libidinal energies”[7]) が原因であるとみなしており、Charlotte Brontë 自身は、「病的な状態」 (“morbid”[8]) だと説明している。彼女の感情に対する沈黙の状態は、彼女の性格に関する様々な解釈を引き起こしている。家族や、Miss Marchmont との死別の際も、Lucy は彼らの死に関する自分の感情を語らず、読者には、彼女が無感覚であるかのように見える。

しかし、実際には、子供時代の喪失の経験は、Lucy の心の中に閉じ込められており、大人になった Lucy は、自分の子供時代の感情を以下のように振り返る。

> Oh, my childhood! I had feelings: passive as I lived, little as I spoke, old as I looked, when I thought of past days, I *could* feel. About the present, it was better to be stoical; about the future – such a future as mine – to be dead. And in catalepsy and a dead trance, I studiously held the quick of my nature.[9]

“I had feelings”、“I *could* feel”という繰り返しから、Lucy は、喪失の体験に何らかの感情を感じていたことが分かる。しかし、彼女は何らかの理由でその

感情を感じる部分を麻痺させた状態（“in catalepsy and a dead trance”）にしていたようだ。“I studiously held the quick of my nature”と、Lucy は、自分自身で感情を感じる部分を握りしめ、感情の表出を抑えようとしていた。さらに、肉親を失った悲しみだけでなく、Lucy は自分の人生において何かを望もうとする情熱も、自分自身の心の中に監禁していた。Mme. Beck の学校で、ある夜、荒れ狂う天気に精神が刺激され、Lucy の中で何らかの意思が目を覚ます（“they [certain accidents of the weather] woke the being I was always lulling, and stirred up a craving cry I could not satisfy”, 121）。

> I did long, achingly, then and for four-and-twenty hours afterwards, for something to fetch me out of my present existence, and lead me upwards and onwards. This longing, and all of a similar kind, it was necessary to knock on the head. (121)

“the being”とは、彼女の心の中に以前から存在していたが、抑圧し、表出しないようにしてきた感情である。その感情とは、現状に満足できず、新しい人生を求め、ここではないどこかへ行きたいという渇望（“This longings”）である。しかし、Lucy は、自分自身に、そのような新たな人生を望むことを禁じ、士師記の中で Jael が Sisera の頭に杭を打ち込むように、自分の頭の中にしまいこんでおかなければならないと言い聞かせる。

このような情熱の抑圧は、自らを労働に励ませ、社会的に自立した地位を手に入れるために自らに課しているようだ。Miss Marchmont を失った際、彼女は、自分の運命を以下のように感じている。

> But another decree was written. It seemed I must be stimulated into action. I must be goaded, driven, stung, forced to energy. My little morsel of human affection, which I prized as if it were a solid pearl, must melt in my fingers and slip thence like a dissolving hailstone. My small adopted duty must be snatched from my easily contented conscience. I had wanted to compromise with Fate: to escape occasional

> great agonies by submitting to a whole life of privation and small pains. Fate would not so be pacified; nor would Providence sanction this shrinking sloth and cowardly indolence. (42)

“Fate”は、Miss Marchmont に寄り添いながら一生を静かに暮したいという彼女の願いを退け、人生を切り開くために行動するようせき立てる。人生に対して希薄な気力と臆病な態度では、“Providence”も Lucy を救おうとはしないだろうと、自分自身に言い聞かせている。自身の力で人生を切り開く生き方を選ばなければならない時、彼女の人間的な愛情は、雹が溶けるように、失われてしまったと言っている。自立を勝ち取るために行動する人生と、人間的な愛情は、共存できないものであり、Lucy は前者を選ばなければならないために、後者を失ってしまったと考えている。Lucy は、喪失の悲しみや、他人への愛情や共感を抑圧して、労働によって社会的な自立のために生きることを自らに課している。

自立のために行動を起こさなければならないために、人間的な感情を抑圧しなければならないという、主人公の抱える苦悩の構図は、Terry Eagleton が Charlotte Brontë の作品を理解する上で重要だと位置付けた「『想像力』と『社会的なもの』の対立」（“the rift between ‘imagination’ and ‘society’”[10]）の構図に当てはまる。Eagleton によると、互いに相反しあう二つの価値観の板挟みになっていた Brontë の人生が、作品の中で衝突する二つの価値観に反映されているという。Brontë は子供時代から、妹や弟と“Angria”という空想世界を舞台に物語を書き、想像の世界の中で遊んでいた。しかし、そのような世界に憧れながらも、大人になると、家計を支えるために、家庭教師として厳しい社会の中で生きることを強いられた。Brontë は、生活の糧を稼がなければならないという義務感と同時に、洗練された感性や空想世界に対する強い憧れを抱いていた。Brontë の中のこの二つの価値観の対立が、作品に織り込まれ、「『想像力』と『社会的なもの』の対立」として表れていると Eagleton は考えている。[11]「社会的なもの」とは、Eagleton の定義を踏まえると、社会化と労働の義務という、外からの要求であり、「想像力」とは、愛や欲望を自由に表現したいという内からの要求である。

この二項対立の構図を踏まえると、Lucy の情熱は、彼女の社会化や労働による自立を勝ち取るための障害物となる。そのため、彼女は、感情を語らず、自ら精神を“catalepsy and a dead trance” (120)の状態に保ち、自分の人生に対する希望は、“knock on the head” (121)と頭の中に閉じ込めていた。

しかし、彼女の心の中に監禁された情熱は、捌け口を求めて Lucy の心を揺さぶり続ける。そこで彼女は、学校の休暇中に、プロテスタント教徒であるにもかかわらず、カトリック教会で告解を行った。これは、Brontë 自身のブリュッセル留学期間中の経験に基づいたエピソードである。Brontë は、後にカトリック教会での告解を単なる「気まぐれ」(“only a freak”[12])だったと妹 Emily に書き送っているが、このエピソードが *Villette* の執筆まで、どの作品中にも反映されず、沈黙が保たれていたことを考慮すると、「気まぐれ」に過ぎない行動だったとは考えられない。カトリック教会での告解は、Lucy の発散することのできない情熱に対処するための手段だったのではないか。

作品中で Lucy は、告解の様子を、“pouring out of some portion of long accumulating, long pent-up pain into a vessel” (179)と表現しており、告解を、感情を注ぎ込む「容器」(“vessel”）に結び付けている。Lucy はのちに Graham からもらった手紙を小瓶に詰め、梨の木の下に埋め、その小瓶を「封印された小瓶」(“sealed jar”) と呼ぶ。Lucy は、「封印された小瓶」を埋めるときの感情が、カトリック教会で告解を行った時と同じであると後に述べているが、告解は、自身の情熱を、“vessel”という空間に閉じ込める「封印された小瓶」であるとも考えられる。すなわち、告解もまた Lucy にとって、子供時代から自分の胸の中に抑圧してきた感情を、空間に閉じ込め、堅固に監禁する手段となり得るのではないか。

しかし、Athena Vrettos は、告解という行為を、抑圧（“repression”）に対抗する、表現（“expression”）の一形態であると主張しており、語りによって感情を外に出すことは、彼女の病的な状態を治すために効果的であるという。[13] 告解が Lucy の苦悩を「表現」し、発散する手段であったと考えるならば、この宗教儀式は、Lucy にカタルシス効果をもたらしたのではないか。

Lucy の告解は、カタルス効果という点では、一時的な慰めをもたらし、効果があった。彼女は、カトリック教会に向かった時の自分の心境を、のちに Graham に以下のように説明している。

> a cruel sense of desolation pained my mind: a feeling that make its way, rush out, or kill me like (…) the current which passes through the heart, and which, if aneurism or any other morbid cause obstructs its natural channels, seeks abnormal outlet. (206)

Lucy は、自分の内面でうごめく絶望的な感情を、体の中を狂ったように駆け巡る血液に喩えている。障害物に血管をふさがれた血液のように、彼女の心の中に閉じ込められていた情熱は、そのはけ口を求めて彼女の精神を苦しめる。抑圧された感情の活動が、告解という形で自分の外に情熱を吐き出すことに駆り立てた。告解を行った後、彼女はこのように語っている。

> the mere relief of communication in an ear which was human and sentiment, yet consecrated – the mere pouring out of some portion of long accumulating, long pent-up pain into a vessel whence it could not be again diffused – had done me good. I was already solaced. (179)

告解を通して抑圧されていた感情の一部（“some portion of long accumulating, long pent-up pain”）を言語化し、発散することによって Lucy の心は慰められた。沈黙によって抑圧された情熱は、告解という宗教儀式の形を借りて言語化されることにより、心の外へ解放することができた。Lucy の情熱の抑圧と解放は、「語り」という行為によって支配されているのではないか。

II　Graham に対する抑圧された情熱と解放

Lucy の抱えるもう一つの抑圧された情熱は、Graham に対する恋心である。

Lucy は、Graham からもらった手紙を何度も読み返すが、Graham が Paulina と恋に落ち、自分の恋心が全く報われることがないとわかると、Graham の手紙を瓶の中に詰め、梨の木の根元に埋めてしまう。Lucy は、Graham への情熱の象徴である手紙を小瓶の中に封印し、埋めることによって、Graham に対する情熱を抑圧しようとした。

瓶の中につめられた手紙は、Lucy にとって、二重の意味を持っていた。手紙は、一方では、見えない場所にしまいこむべき、故人の“mementos” (326)であり、またもう一方では、保存するべき“treasure” (328)である。まず、“mementos”としての手紙について分析する。「埋葬」(“A BURIAL”, 324)という章題からも明らかなように、手紙を埋める行為は、死別を連想させる。Graham との親密な交際という「希望」をあきらめるということは、Lucy にとって、「希望」との死別であった(“…the Hope I am bemoaning suffered and made me suffer much: it did not die till it was full time: following an agony so lingering, death ought to be welcome” ,326)。「希望」は死に、手紙がその希望の形見 (“mementos”) として手元に残った。Lucy は、近しい人を亡くした人が、喪失を思い出し、胸が痛まないように形見を眼の届かない場所にしまうことに喩えて、自分も手紙をどこかにしまいこもうと決心する。そして手紙を埋葬し、情熱を封じ込めることによって、彼女は報われない恋心から解放され、精神的な強さを得たかのように錯覚し、運命の導きに従おうとする。

> “If life be a war, it seemed my destiny to conduct it single-handed. …Perhaps, to effect this change, another pitched battle must be fought with fortune; if so, I had a mind to encounter: too poor to lose, God might destine me to gain. But what road was open?-what plan available?” (329)

肉親や Miss Marchmont との死別と同じように、情熱の抑圧と引き換えに、彼女は、社会的な自立を目指そうとする。しかし、Lucy は一方でそのような人生に疑問を抱き、他者への愛情を自分の人生の糧として生きる人生に憧れを感じている。

> ‘…be content to labour for independence until you have proved, by winning that prize, your right to look higher. But afterwards, is there nothing more for me in life – no true home- nothing to be dearer to me than myself, and by its paramount preciousness, to draw from me better things than I care to culture for myself only? Nothing, at whose feet I can willingly lay down the whole burden of human egotism, and gloriously take up the nobler charge of labouring and living for others?’ (400-01)

Lucy は“true home”や、“[something] to be dearer to me than myself”を手に入れたいという希望を死んだものとして、小瓶に閉じ込め、埋葬したはずだったが、これらに対する強い憧れは、彼女の心の中に未だに残っており、自立を勝ち取るための労働の人生に踏み切れずにいる。Lucy の内面で、「『想像力』と『社会的なもの』」の葛藤が起こっている。

彼女が Graham の手紙を埋めなければならない理由はもう一つある。手紙は、Graham との楽しい交流の証であり、Lucy にとって“treasure”でもある。彼女が手紙を小瓶の中に封印したのは、Mme. Beck や M. Paul から大切な手紙が盗み読まれることを防ぐ為でもあった。彼らはしばしば「理性」の化身として、Lucy の生活における快楽や娯楽を制御しようとする。Mme. Beck は、Lucy の身辺をスパイし、浮ついた恋の徴候がないかを嗅ぎ出そうとし、一方、M. Paul は、Lucy が Graham への恋心にふけることを厳しく叱りつける。「理性」は時に擬人化され、また時には Mme. Beck や M. Paul の言動に象徴され、Lucy の Graham に対する情熱を冷まそうとする。

Bretton 一家のもとから帰ってきた Lucy に対して、「理性」は、Graham からの手紙など期待しないようにと冷たく言い放つ。「理性」は、生活の糧を自分自身の労働によって稼ぎ、死を待つのが Lucy の人生なのだと宣告する（“according to her [Reason], [Lucy] was born only to work for a piece of bread, to await the pains of death, and steadily through all life to despond”, 255-256）。このような「理性」の要求から逃れるために、Lucy は、「想像」（“Imagination”, 256）

に癒しを求める。「想像」は、Lucy に甘い天上の食べ物（“food, sweet and strange, gathered amongst gleaning angels, garnering their dew-white harvest in the first fresh hour of a heavenly day” ,256）を与え、一時的な、空想上の安らぎをもたらす。このような見せかけの癒しに頼る Lucy を、次は「理性」にかわって M. Paul が叱りつける。M. Paul は、Lucy は、甘い毒を飲もうとつかみ取り、体に良い苦味を嫌悪する、と言って非難する。（‘You look,’ said he, ‘like one who would snatch at a draught of sweet poison, and spurn wholesome bitters with disgust’ ,259）。M. Paul の言葉の“a draught of sweet poison”は「空想」が Lucy にもたらす“food, sweet and strange”と一致し、M. Paul は、「理性」と同じように“wholesome bitters”を Lucy に押し付けようとする。

このような Lucy と、「理性」の化身との対立は、*Jane Eyre* における St. John と Jane の対立にも見られる。St. John は、禁欲的な性格で、世俗的なものに嫌悪のまなざしを向けるが、自分の情熱の達成に関しては野心的な人物である。そのため彼は、自分の目的の達成のために、Jane にも自分と同じような、世俗的な楽しみを排除した生活を強い、自分の妻として、インドでの布教活動に人生を捧げるよう要求する。

彼は、Jane の反抗心を麻痺させ、彼の望む生き方を彼女に押し付けようとする(“he acquired a certain influence over me that took away my liberty of mind: his praise and notice were more restraining than his indifference. I could no longer talk or laugh freely when he was by”[14])。理性の化身の監視の下では、反骨精神に富む Jane さえ、心の自由を失い、自由な情熱の表出が奪われてしまう。さらに、St. John は、神は Jane を宣教師の妻として作り、愛ではなく、労働のために作られたのだと言い放つ(“God and nature intended you for a missionary’s wife….you are formed for labour, not for love” , 464)。Lucy と同じように Jane は St. John によって、情熱を表現し、発散することを抑圧され労働という、Eagleton の言葉でいえば「社会的なもの」に従事することを強いられる。二つの小説に見られる「理性」は、主人公が他者の愛情や共感を求めようとする渇望を禁じ、労働によって、他者に頼らず、自立した人間として生きる人生を勝ち取ることを執拗に迫る。 Jane は、“When he said ‘go’, I went; ‘come’, I came; ‘do this’, I did it” (459)と St. John の命令にあらがうことができず、自身

の感情が監禁されているように感じていた。

> there would be recesses in my mind which would be only mine, to which he never came; and sentiments growing there fresh and sheltered, which his austerity could never blight, nor his measured warrior-march trample down. But as his wife – at his side always, and always restrained, and always checked – forced to keep the fire of my nature continually low, to compel it to burn inwardly and never utter a cry, though the imprisoned flame consumed vital after vital – *this* would be unendurable. (470)

Jane は、感情が宿り、「理性」の圧力の及ばない、心の奥の空間（“recess”）を St. John の介入から守ろうとする。この空間（“recess”）は、Graham の手紙とともに Lucy の情熱を閉じ込めた「封印された小瓶」を思い起こさせる。Lucy も Jane も、他者の介入や抑圧を免れるために、自分の感情をある空間に閉じ込めるという観念に取りつかれている。Lucy が自分の精神生活を示す手紙を小瓶に閉じ込めて M. Paul や Mme. Beck の介入を防ごうとしたのと同じように、Jane もまた、St. John による精神的抑圧を免れるために、感情を心の奥の空間に庇護しようとした。St. John の妻になることは、その心の奥まで彼に踏みこまれ、監視や抑制を受けることであり、そのような監禁（“imprisoned flame”）によって、心が蝕まれていくように感じている。窮地に陥った Jane を救ったのは、“Jane! Jane! Jane!” (483)という Mr. Rochester のテレパシーだった。この超自然的な現象によって、Jane は我に返り、St. John の要求を振り払い、情熱の衝動に導かれるままに、Mr. Rochester のもとへ戻ったのである。そして、Mr. Rochester との結婚と、彼の不自由な身体を支えて生きるという使命を背負うことによって、Jane の抑圧された情熱は報われ、解放される。

このように *Jane Eyre* では、理性によって抑圧された情熱が、幸福な結末によって最終的に満たされるが、*Villette* においては、Graham との結びつきによる情熱の昇華ではなく、別のはけ口によって、抑圧した情熱を発散しようとする。それが、彼女が封印された小瓶を埋めた直後に登場する修道女の霊

である。Ruth D. Johnston は、修道女の霊は Lucy の精神状態の投影であり、彼女の感情が抑圧された状態であることを象徴すると指摘している。[15]

修道女の幽霊は、「小瓶」に閉じ込められた手紙を象徴し、彼女の閉じ込められている墓は、その手紙が封印されている「小瓶」に対応する。生きたまま埋められた修道女のように、Lucy の情熱もまた、強引に埋葬された。そのため Lucy は、封印した感情が、墓の中で動いている様子を想像し、小瓶に閉じ込め、「埋葬」したはずの感情が生きているかのように感じる。

> Was this feeling dead? I do not know, but it was buried. Sometimes I thought the tomb unquiet, and dreamed strangely of disturbed earth, and of hair, still golden and living, obtruded through coffin-chinks. (401)

金色の髪や墓の中でうごめく物体は、生きたまま埋められた修道女を連想させる。このように、修道女の霊が Lucy の埋葬した手紙を連想させ、さらに、その霊が Lucy の前に現れて出てくるということは、Lucy が、地中に埋めてあきらめたはずの情熱に未だに取り付かれていることを意味している。抑圧された情熱は、幽霊という形で監禁された空間から抜け出し、解放を求めている。

しかし、修道女の霊に投影された Lucy の情熱は、幽霊として封印から抜け出すだけでは、解放を達成したとは言い難い。Lucy が告解によって子供時代の抑圧した情熱を解放したとき、その要となったのは、言葉で語ることによってカタルシス効果が得られることであった。幽霊は、姿としては現れるが、言葉を発することはできない。Lucy が修道女の霊に対して“Who are you? and why do you come to me?” (329)と問いかける場面は、語りによって情熱を発散することの出来ない状態を象徴している。Lucy が霊に“If you have any errand to me, come back and deliver it” (330)と自分の前に現れる理由を聞いても、“She stood mute” (329)と、黙ったままで、決して言葉を発することはない。沈黙したままの修道女の霊は、Lucy の情熱の発散が、不完全であることを示唆しているのではないか。

そのため、Graham に対する情熱は発散されずに、Lucy は一生抑圧し続け

なければならなかった。これは、Graham に対する情熱を“the tent of Peri-Banou” (505)という魔法のテントに例えた一節から明らかである。

> I kept a place for him [Graham] too […] I think it was like the tent of Peri-Banou. All my life long I carried it folded in the hollow of my hand – yet, released from that hold and constriction, I know not but its innate capacity for expanse might have magnified it into a tabernacle for a host. (505)

Graham に対する情熱が心の中に宿る場所を、Lucy は“a place for him”と表現する。この、Graham のための空間とは、“Peri-Banou”のテントのように、彼女が手で握りしめておかなければ、すぐに大きく広がり、彼女の心を占領してしまう。そのため、Lucy は、そのテントを握りしめ、一生の間持ち歩いたという。手の中にテントを握りしめるイメージは、Lucy が Graham に対する情熱が自分の心を支配しないように抑圧していることを暗示している。沈黙した修道女の霊は、抑圧した情熱の解放にはつながらず、Graham に対する情熱は、Lucy の心の中で生涯抑圧され続ける。

III　M. Paul に対する情熱の抑圧と解放

Graham に対する情熱は、M. Paul に対する情熱へと転換されたと考えることも可能である。Lucy は、Graham に対して表現できなかった愛情を、M. Paul に対象を変えて表現している。フォブール・クロティルドの学校で、Lucy が M. Paul に給仕をし、果物やパンを分け合って食べる場面は、幼い Paulina と Graham の朝食の場面を想起させる。Lucy は子供時代に、Paulina が Graham に給仕をし、彼と朝食を分け合って食べる様子を傍から眺めていた。まるで、幼いころに満たされなかった Graham に対する情熱を、M. Paul という代替の人物で満たすかのように、彼女は Paulina が Graham に給仕をする場面をフォブール・クロティルドで再現した。

さらに、Graham に対しての情熱と異なり、M. Paul に対する愛情は、自立

のための労働という目的も同時に果たすことができるため、「理性」によって妨げられることはない。M. Paul は Lucy の勤労的な生活と禁欲的な性格を評価しており、彼の愛に報いることは、同時に、労働に励み、社会的自立を達成することでもあった。Graham に対しては「理性」によって封じ込められた情熱も、M. Paul に対する愛情においては、情熱という「想像力」と勤労という「社会的なもの」の融合が可能であるため、情熱を封じる必要がない。このように、M. Paul に対する愛は、Graham に対して封印した情熱を代替的に解放する手段であると解釈できる。

しかし、M. Paul の死によって、Lucy の情熱は再び発散対象を失い、抑圧しなければならなくなる。情熱の抑圧のために Lucy のとった手段は、耐えることの出来ない現実からの逃避と、語りからの自己消失である。Lucy は、M. Paul の死について語ろうとはせず、彼の乗った船が難破したことだけを示唆して、突然、“Here pause: pause at once. There is enough said”(546)と、*Villette* という物語自体を終えてしまう。

語り手 Lucy の自己消失は、Lucy が自身をフォブール・クロティルドの学校という空間の中に閉じ込め、外界の時間の流れから閉ざしてしまう行為であると解釈することもできる。語り手 Lucy が、フォブール・クロティルドという「封印された小瓶」に見立てた空間の中に自らの情熱を封印する過程は、語りの言葉の時制の変化によって描き出されている。

フォブール・クロティルドの学校で M. Paul の帰国を待つ Lucy は、M. Paul の死を語らなければならない段階で、それまで過去形による回想録として語っていた物語を、現在形の語りへと切り替える。

> And now the three years are past: M. Emanuel’s [M. Paul’s] return is fixed. It is Autumn;
> he is to be with me ere the mists of November come. (545)

語り手 Lucy の声は、次第に、主人公 Lucy の声と重なり、彼女は今、M. Paul の帰りをフォブール・クロティルドの学校で待っていたころの自分の目線で物語を語る。

> My school flourishes, my house is ready: I have made him a little library, filled its shelves with the books he left in my care: I have cultivated out of love for him (I was naturally no florist) the plants he preferred, and some of them are yet in bloom. I thought I love him when he went away; I love him now in another degree; he is more my own. (545)

M. Paul への愛は、当時の若いころの自分の愛よりもずっと強まっているというように、語り手と主人公の間に時間の隔たりが無くなり、Lucy の人生が、まるで、M. Paul を待っていた時間から全く進んでいないかのようである。

> The sun passes the equinox; the days shorten, the leaves grow sere; but he is coming.
> Frosts appear at night; November has sent his fogs in advance; the wind takes its autumn moan; but he is coming. (545)

この箇所のセミコロンの前の節では、秋が深まっていく様子が語られ、セミコロンの後ろでは、M. Paul が帰ってくるという期待が現在進行形で反復される。この文章は、フォブール・クロティルドの学校の外では、季節が変化しているのに対し、内部の空間では、Lucy が M. Paul の帰りを待ち、時間が停止しているかのような錯覚を読者に起こす。このように Lucy は、M. Paul を失ったその後の人生を語らず、彼の死別によって報われなかった情熱は、語りの停止によって、その発散が抑圧されている。

Villette はこのように、M. Paul の死をほのめかして幕を閉じるのだが、Lucy の抑圧された情熱は、作品の別の場所で解放されていると考えることが出来るのではないか。Lucy の雇い主であった Miss Marchmont が Lucy の将来の姿を暗示する人物であると解釈することによってそう考えることは可能である。

Lucy の雇い主であった Miss Marchmont と Lucy は、ともに恋人と死別し、孤独な人生を強いられている。さらに、Miss Marchmont の死の予兆として登場する Banshee の風が、再び最終章で登場し、M. Paul の死を暗示しているこ

とから、Robert Bernard Martin は、Miss Marchmont の人生と、Lucy の未来が関連付けられていると主張している。[16] このように、二人の様々な共通点によって Brontë は、Miss Marchmont の死の間際の語りに、M. Paul を失った後の Lucy の人生を反映させたと考えられる。

Miss Marchmont は、恋人と死別して以来、30 年の間、その悲しみを引きずって生きており、自分がこれまで「悲しみにとらわれた身勝手な女」（“a woe-struck and selfish woman”, 46）であったと Lucy に話す。しかし彼女は、死を直前にして、Lucy に、結ばれずに亡くなった自分の恋人の思い出を語り、全てを語り終わると、「善良な心」(“a better frame of mind”, 46)の人間として生きたいという思いに至っていた。語りを通して Miss Marchmont に起こった変化は、彼女の抑圧していた恋人への情熱が、語りを通して解放されたことを示唆している。

“I possess just now the hours, the thoughts, the hopes of my youth. I renew the love of my life – its only love – almost its only affection” (44)という言葉の通り、Miss Marchmont は恋人 Frank の記憶を鮮やかに思い出し、*Villette* という物語の挿入話であるかのように彼と死別した晩の出来事を詳細に語る。Miss Marchmont の思い出話は、Lucy との対話というよりむしろ、独白の形式に近く、Lucy の人生という本筋とは関係なく、作品における余分な章であるという批判も多い。しかし、Brontë が Miss Marchmont に恋人の死について長々と語らせたのは、語りという行為そのものが、本作品において抑圧された情熱を解放させる手段として機能しているためではないか。Miss Marchmont は、語り始めは、恋人の喪失の悲しみにとらわれ、自分の運命を嘆くばかりだった。

> ‘[…] let me reflect why it was taken from me? For what crime was I condemned, after twelve months of bliss, to undergo thirty years of sorrow?’… ‘I cannot – cannot see the reason; yet at this hour I can say with sincerity, what I never tied to say before – Inscrutable God, Thy will be done! And at this moment I can believe that death will restore me to Frank.’ (44)

Miss Marchmont は、運命に対する不満足をあらわにし、なぜ、神は彼女の恋人を奪ったのかと嘆いている。しかし、Frank を失った日のことを詳細に思い出し、Lucy に語ることを通して、次第に恋人の死という自らの運命を受け入れ、他者の幸福のために生きようという「善良な心の持ち主」（“a better frame of mind”）へ変化していく。

> I think from this day I am about to enter a better frame of mind, to prepare myself for reunion with Frank. You see I still think of Frank more than of God; and unless it be counted that in thus loving the creature so much, so long, and so exclusively, I have not at least blasphemed the Creator, small is my chance of salvation. What do you think, Lucy, of these things? Be my chaplain and tell me.’ (46)

Miss Marchmont は、Lucy に自分の司祭になってくれと頼み(“Be my chaplain and tell me”)、自分の告解にこたえてくれるよう頼んでいる。この言葉からも明らかであるように、Miss Marchmont の語りの場面は、Lucy を司祭に見立てた告解の構図を描き出している。カトリック教会で Lucy が自分の抑圧してきた情熱を告解を通して発散したように、Miss Marchmont も告解という形式を借りて恋人への思いを語ることによって自らの情熱を解放しているのではないか。Miss Marchmont の死の間際の語りは、一人の老女が、失った恋人に対する抑圧した情熱を語りによって解放する場面である。

Miss Marchmont に M. Paul を失った後の Lucy の生きる姿勢が投影されていると考えるならば、語りの停止によって抑圧した M. Paul に対する情熱も同じように、Lucy がその情熱を語ることによって解放されるのではないか。M. Paul の死によって、Lucy の物語は幕を閉じるが、*Villette* という作品は、主人公 Lucy の回想録という形式をとっている。語り手 Lucy は、作品中で“for I speak of a time gone by: my hair which till a late period withstood the frosts of time, lies now at last, white, under a white cap, like snow beneath snow” (51)と、自分の語る物語が過去のことであり、今の自分は髪が白髪になった老女であることを明示している。*Villette* という作品は、老女 Lucy が過ぎ去った昔の情

熱を語る回想録であり、その様子は、Miss Marchmont が Lucy を前にして過去の情熱を語った姿と重ね合わせることができる。すなわち、Lucy は、*Villette* の中で、自らの化身である Miss Marchmont に結ばれなかった恋人への思いを語らせることによって、M. Paul に対する自身の抑圧した情熱を解放しているのである。M. Paul に対する Lucy の情熱は、このようにして、作品の中の他者の語りを通して解放されたと考えることができる。

結

Villette は主人公 Lucy の情熱の抑圧と解放の連鎖の物語である。情熱の解放は、その情熱を言語化し、発するという語りによってのみ可能であり、語られなかった情熱、すなわち、Graham への情熱は、Lucy の心の中に抑圧されたままである。最終章において、Lucy は語りを突然放棄し、M. Paul の死の真相も Lucy のその後の人生も明らかにされないまま、曖昧にされた結末として *Villette* は幕を閉じる。一見すると開かれた結末のように読めるが、しかし、語りという行為そのものが Lucy の情熱の発散手段であり、情熱を抑圧して生き続けた半生を語り終えたことで、Lucy の情熱は解放され、物語は完結したのではないか。

また、*Villette* は、Lucy だけではなく、作者、Charlotte Brontë の語りによる情熱の発散の手段でもあると考えられる。Charlotte Brontë は、*Villette* を執筆するまでに、兄弟、姉妹を全員失っていた。Graham のモデルである出版社の George Smith や M. Paul のモデルであるブリュッセル留学時の彼女の師、M. Heger に対する報われない恋も経験している。[17] Brontë が抑圧してきたこれらの情熱は、*Villette* の中で Lucy によって再現され、語られることによって、作者の心中から解放されたのではないか。すなわち *Villette* は、作品そのものが、抑圧から情熱を解放するための Lucy Snowe の告解であると同時に、作者 Charlotte Brontë の告解でもあるのだ。

註

1 George Henry Lewes, “Passion and Power”. The Leader. 12 February 1853. Rpt. In *Charlotte Brontë: Jane Eyre and Villette: A Casebook*. Ed. Miriam Allott. (London: Palgrave Macmillan, 1973) 78.
2 David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. (London: Constable & CO LTD, 1934) 129.
3 Matthew Arnold, Letter to Mrs. Forster, 14 April 1853, Rpt. in *Charlotte Brontë: Jane Eyre and Villette: A Casebook*. Ed. Miriam Allott. (London: Palgrave Macmillan, 1973) 93.
4 Charlotte Brontë, “a letter to W. S. Williams,” 6th November 1852, Elizabeth Gaskell. *The Life of Charlotte Brontë* (London: Penguin, 1997) 392.
5 Terry Eagleton, *Myths of Power : A Marxist Study of the Brontës*. Anniversary ed. (New York: Palgrave Macmillan, 2005) 90.
6 Athena Vrettos, “From Neurosis to Narrative: The Private Life of The Nerves in *Villette* and *Daniel Deronda*.” *Victorian Studies*. (33-34(1990):545-79).563.
7 Russell. M. Goldfarb, *Sexual Repression and Victorian Literature*, (Cranbury: Bucknell University Press, 1970) 157.
8 Charlotte Brontë, “a letter to W. S. Williams,” 6th November 1852, Elizabeth Gaskell. *The Life of Charlotte Brontë*. 392.
9 Charlotte Brontë, *Villette*, ed. Helen M. Cooper, (London: Penguin, 2004) 120. 以後、本書からの引用は、本文中の括弧内に頁数のみを記す。
10 Eagleton, 12.
11 Eagleton, 13.
12 Charlotte Brontë, Charlotte to Emily; Brussels, 2nd September 1843, Rpt. In Juliet Barker, *The Brontës: A Life in Letters*, (Woodstock : Overlook, 1998) 117.
13 Vrettos, 568-69.
14 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, ed. Stevie Davies, (London: Penguin, 2006) 459. 以後、本書からの引用は、本文中の括弧内に頁数のみを記す。
15 Ruth D. Johnston, “Dis-Membrance of Things Past: Re- Vision of Wordsworthian Retrospection in *Jane Eyre* and *Villette*”, *Victorian Literature and Culture*, 22 (1994): 73-102. “a projection of Lucy’s inner psychological state, symbolizing her temptation to withdraw from her life and to suppress her feelings.”
16 Robert Bernard Martine, *Charlotte Brontë’s Novel: The Acceptance of Persuasion*, (New York: Norton, 1998) 152.
17 Juliet Barker, *The Brontës: A Life in Letters*, Intoroduction および 329－30 において Barker は、Charlotte Brontë と出版社の George Smith の書簡から、Brontë が Smith に対して特別な思いを持っていたことを指摘している。